

書評

医学・医療の先駆者の証し

〔評者〕 高久 史麿

日本医学会長／前・自治医科大学学長

日野原 重明(著)

『日野原重明ダイアローグ』

本書は日野原重明先生の講演録、インタビュー、座談会などを中心にまとめたもので、話の内容は、W・オスラー博士の数々の言葉の紹介、医学教育、研修制度、プライマリ・ケア、ホスピス、診療録、臨床疫学のあり方、EBM、看護教育など、極めて広範囲にわたっている。

日野原先生は様々なシステムを日本に導入された医学・医療の先駆者として、日本で最も尊敬されている医師である。本書を通読して痛感したのは、私たちが常日頃感じている医学教育や医療のあり方に関する様々な問題点を、1973年の座談会「英国の医療とプライマリ・ケア」(J.Fry氏、紀伊國猷三氏、小林登氏)に始まり、2005年の座談会「誰がために記録はある」(児玉安司氏、阿部俊子氏)に至るまで、一貫して日野原先生が指摘しておられることである。「医療はscienceをベースにしたartである」ということをたびたび強調されていることも印象深い。

最近になってわが国では、幅広い診療能力を持った総合医(総合診療医)、さらに総合医としての能力をベースに持った専門医の存在の重要性が広く認識されるようになってきているが、このことも日野原先生は本書の中で繰り返して強調しておられる。病歴の聴取や身

体所見を的確に把握する技術を身につけることの重要性を指摘し、検査中心の医療の現況を繰り返し批判している。私はこのような日野原先生の考えに全面的に賛成である。

本書は対話形式のものが大部分を占めているため、非常に読みやすかった。また、私がかねてから敬愛する先生方が数多く登場しておられることもあって、楽しくかつ懐かしい思いで読了することができた。最初の章が「この先生に会いたい!! 日野原重明先生に聞く」という講演録であり、「研修医に是非読んでもらいたい本」という関連記事もついているが、本書はその言葉通りの内容である。ぜひ1人でも多くの若い医師に読んでいただくよう、強く推薦する次第である。



A5 頁264 2012年
定価2,310円(本体2,200円+税5%)
ISBN978-4-260-01706-0 医学書院刊